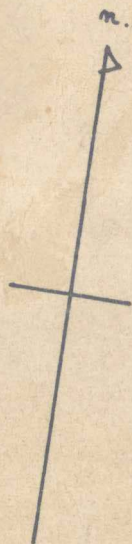
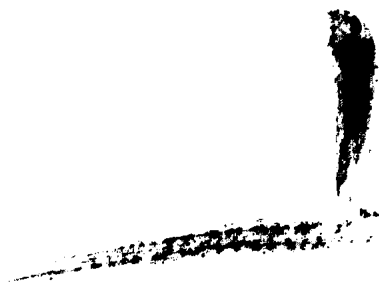


海の墓標 水上勉



海の墓標

水上 勉



講談社版

標 墓 の 海

昭和四十年一月二十日 第一刷発行

著 者 水上 勉（みなかみ・つとむ）

発行者 野間省一

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 大進堂製本株式会社

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

振 替 東京三九三〇

電 話 東京（942）一一一一（大代表）

定 価 三四〇円

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。
著者の了解により検印廃止。

© 水上 勉 一九六五

海の墓標・目次

第一章	北の海へ		七
第二章	死の謎		元
第三章	発展		兎
第四章	点		七
第五章	柳橋と瑤瑠の間		三
第六章	怒りの海		二五
第七章	線		二六

第八章 迷宮……………二五

第九章 半島の冬……………二七

第十章 曙光……………二九

第十一章 北海道から来た男……………三〇

第十二章 軌跡の接点……………三三

第十三章 北帰行……………三五

第十四章 海の墓標……………三六

裴 幘 丹 何 弥 丹 波 子

海
の
墓
標

第一章 北の海へ

1

根地木牛松は、掘立小舎のような家の戸口にかけてある菰をまきあげると、だらだら下りになった褐色の砂浜から、すぐに蒼黒い波の立ち騒いでみえる海を眺めた。風があった。その風は、六月の末だというのに、牛松の浅黒い肌につきさすように吹きつけてきた。

「とみ、晴れちよるな。カイガラ島が浮いて見えるわ」

と牛松はいった。しわがれたその声には力が入っていた。藁ぶき屋根の粗末な平家の奥の、うす暗い居間の上り口でいまでも、牛松の弁当箱を風呂敷に包み終えたとみは、

「あいよ」

と戸口へ走り出てきた。弁当を牛松に手わたした。なるほど沖は白く光ってみえる。

「お父、氣イつけてな。丸八の兄さんのようにクマに追いかけられたらな、すぐにひっかえしてくるだよ。お父」

とみは背中をさすりながらいくらかまがりかけている腰をしゃきりと延ばすと、片手で頬かむりの手ぬぐいをとった。

「大丈夫だ、お父、船にゃ、おめえ、馬力のある発動機がついてんだからよ」

「うんだ」

と牛松は同感したようにいった。戸口に立つて煙管きせるをくわえ、皺くちやの顔を心もちほころばせている。浜にはまだ白旗が見えない。旗は出船の日の知らせであつた。

「ゆんべ遅くに話がきまつたンじゃから足がそろわんようじゃな。旗があがらねえべ」

「組合の与七の仕事だに……」

ととみもいった。草っ原の波が砂浜と境界をつくっているあたりに黄色く光った竿のようなもののくくりつけてある黒い棒杭がみえる。と、このとき村口の方から、がやがやと人ごえがして十人あまりの漁夫がひとかたまりになって磯へ出るのがみえた。船がそこに待っている。先頭の黒い人影が一つ走ってゆくのが見られた。

「来だ、来だ」

と牛松がいった。

「寝くたれちよつたンにちがいねえべや」

人影は組合の与七だつた。竿のような棒をくくりつけた杭の根もとに立ち止まると、やがて砂浜にしゃがみこんだ。何かごそごそしているようだったが、紐のようなものをひっぱりはじめると、白い旗が、するすると竿先へのぼつた。風の中でそれは半紙のように光つた。

「用意が出来たようじゃ。みんなが村口を出よるぞ。とみ、そんなら行つて来ッど」

「あいよ」

と、とみは浜へ下りてゆく牛松を見送つた。牛松の背中は年のせいもあって、めっきり猫を負うようになっているので、若いころ武張つてみえた右肩さがりの怒り肩が、左右に振られてゆくうしろ姿は貧相にみえた。六十三の牛松のこの姿をとみは永年見馴れてきたとはいえ、そ

の朝にかぎって妙に眼に焼きつけている。

沖の色が白いせいばかりではなかった。クマとよばれるソ連の快速監視船が国境の海に出没し、牛松たちの所属する齒舞^{はばま}コンブ漁組の出漁船を追いまわしていたからである。組合の指示にしたがって、十日間の出漁は止められていたのだが、昨夜おそくなって仲間から伝言があった。ようやく、今日から出漁してもよいという許可が下りたというのだった。

とみの眼に、いま沖の光った白い色が痛いほど輝いてみえる。十日のあいだ眺めてばかりいたその海には、総領の彦次が難破したサケ・マス船といっしょに眠っていたのだ。とみはしばらくいた眼を何どもしばたかかせて、沖を覗めた。息子の死んだ海へお父^{おとう}が出てゆく。やがて、浜をふるわせるサイレンが鳴った。船が出る合図だった。浜に停泊していた高志丸が、やがて、ポンポンと蒸気を空にふきあげ、船首を北にゆっくりまわしはじめた。牛松の姿は船の中に点のように見える。

高志丸は、やがて、波間をたゆたいながら、カイガラ^{カイガラ}の沖に向って小さくなっていった。昭和三十×年六月二十九日の早朝七時のことである。根地木とみが、夫牛松の最後の姿をみたのはこの朝の出がけになっている。牛松は帰ってこなかったのだ。十一人の乗組員のうち、牛松と船長株の小林多良次という同じ齒舞の漁夫がソ連船にこの年の第一号密漁者として連行されていった。

「カイガラからな。境界を出てよ、モエモシリの方に向っていったがよ。その時はクマの出てくるような気配はちっとも無えべや、みんなゆったりした心でコンブさカギでとってよオ、船のへりへ積みこんでいただよ。霧があっただ。飯にしようかいつてる時間じゃから十二時近かったべ。シュルッシュルッて霧の中で音がしたど……、やにわに、おめえ、クマがうしろか

らによっきり出てきた。船長が機関士の松太郎に早よあとんどりせいゆうて命令したども間にあやせん」

もどってきた同僚たちは口ぐちに脂のにじみ出た顔をひきつらせてとみを囲んでたよりない説明をした。根地木とみは呆然として海を見ているしかなかった。九人だけがもどってきている。牛松と多良次の二人だけが顔を見せない、二人とも年寄りだった。若い者ばかりが帰ってきている。そんなことがあってはならなかった。

「組合じゃな、すぐに巡視艇にお願いしてよ、モエモシリへ身柄をひきわたしてくれて頼みこみに行ってもらうべとゆうちよる、安心せい、おっ母。お父は二、三日でもどって来る。きつともどって来ッにきまच्चよる」

「……………」

とみは一年前の沖の荒れた夜の彦次の帰ってこなかったあの時も、浜でこうして村人の口から、このようなたよりないなぐさめの言葉をあびたことを思いだした。

「おっ母、氣イ落さんとな、待つだ。待ってるこっだ。……」

と漁夫の一人がとみに風呂敷包みを手渡した。それは朝がけに渡した牛松の昼飯だった。

「おっ母。お父の弁当箱だで」

うけとった弁当箱は重かった。牛松はたべていなかった。飯も喰わずに働いたお父の姿が偲ばれて悲しかった。

北海道根室半島の歯舞村。詳述しておく、この半島は三年前から、根室市に合併されたいくつもの漁村が点在していた。東西にのびた細長い楕円形の半島なのである。根室の町から、

友知、沖根婦、婦羅理、齒舞、瑠瑠瑠、納沙布といった南海岸に面したこれらの村落は、昔から、コンブ漁の豊漁地として知られていた。立木一つない荒涼たる草原地帯に出来た村であった。

漁民たちは、コンブ船とよばれる発動機船にのって、沖のカイガラ島の近海にコンブ漁に出るのを仕事の大半としていた。昭和三十×年六月二十九日、根地木牛松、小林多良次が捕えられてから、七月までのあいだに、この半島から二十三人のコンブとり漁夫が漁に出たまま帰ってこなかった。ソ連監視船に連行されたためである。帰されてきた男はそのうち三人いたが、男たちのはなしをきくと、捕われた漁夫たちはシコタン島で取調べをうけて、クナシリ島で裁判にかけられているということであった。

日本漁船が国境を無断で侵犯し、ソ連領内にスパイ行為を働いたという容疑によるものである。漁夫たちはソ連国で裁判され、刑期が終わるまで、ノルマを果す土方その他をつとめながら服役していなければならない。そのために日本へ帰ってこないということであった。

納沙布から東の対岸を眺めると晴れた日は右手に、アキユリ(秋勇留)、モエモシリ(萌茂尻)ハルカラ(春刈)、ユリ(勇留)、シホツ(志発)、スイショウ(水晶)と順々に台地状をなした島島が見える。さらに、これらの島の裏側には、納沙布からは見えないけれど、タラク(多楽)、シコタン(色丹)の二つの島があった。この二つの島を合わせて呼称されたハボマイ・シコタン諸島といわれる弓状群島は、太平洋戦争終了時まで多くの日本人漁夫が定住したサケ、マス、コンブの漁業場として栄えた日本領土だった。ところが終戦になって、カイガラ島とよぶ納沙布と水晶島との中間、すなわち、納沙布から約千八百メートルの地点にある白い台状の島を境界にして以東の島はソ連の管理下に入った。日本はもちろんのことだが、ソ連政府

もまた、これらの島々が、日本領土であったことをみとめながらも、日ソ平和条約が結ばれていないから、それまでの間はおあずけを喰っている島なのである。

ソ連管理下にある群島との境界にあるカイガラ島は満潮時には水面に没し去るほど低い。岩礁がとびとびに浮き出た小さな島であるが、昔からコンブの宝庫といわれた海域であった。すなわち、このカイガラ島以東に境界線をソ連が一方的にひいたことによつて歯舞漁民はこの領海線を超えないかぎりコンブの宝庫に立ち入ることが出来なかった。悲劇の海とよばれるにいたつた理由はここにある。ハボマイ・シコタンの島々が、日本国に返還されないかぎり、根室半島の突端にある納沙布灯台は本土の最東端となった。

納沙布の村に、今日も背のひくい灯台がともっているが、灯台といえは、海上千八百メートルの地点にある棒を倒したようにみえるカイガラ島にも、灯台はあった。しかし、それは無灯の灯台であった。灯のない灯台——、それはいつも深い霧にかくれていたし、晴れた日になると、針を立てたようにキラキラと光ってみえた。夫と息子を海にとられて、ひとりぼっちになった漁婦の根地木とみが住んでいる村は、この納沙布から南へ約一里半ばかり海ぞいの道を歩いた瑠瑤瑠とよばれる村はずれにあった。瑠瑤瑠はうらさびれた貧しい村落にすぎない。凹凸のはげしい小さな岬や、半島からジグザグに出入りしている海岸線に、細長い荒砂の浜がどこまでものびている。浜から村落のある台地へくるまでは、畑地にもならない荒涼たる草っ原がつづいた。そこには、それでも瘦せた畑がとびとびにつくられていて、ニンジン、大根、キャベツなどの生気のない葉が寒風にそよいでいた。村民は、海に生きるしか生活の方法がないのだった。サケ、マスなどの沿岸漁業が下火となった今日では、漁民の命の綱はコンブとりにあった。

コブ。われわれが、食卓にのせるあのつくだ煮や、コブ巻きの「昆布」のことである。

2

根室半島の突端の瑠瑠瑠の村から一人の老漁夫が姿を消した六月二十九日の翌三十日の朝のことである。東京都の中央区にある、日本橋交差点から白木屋デパートの前を経て、昭和通りの方へ来かかる陽かげの舗道を、木山市太郎は茶色の皮カバンを下げて歩いてゐた。木山の会社は昭和通りへ出た向い側角にある東洋製薬である。戦後に出来た薬品会社としては一流に属する製薬会社であった。都下田無町に工場をもっているが、昭和通りの建物は本社になっている。その本社が、前方に化粧煉瓦れんがの美しい姿をみせて朝陽をうけていた。木山市太郎は、ふと、うしろから自分の名をよぶ声をきいて足をとめた。

「木山君、お早よう」

ふりかえると研究室の飯塚恒夫が背後に顔をにんまりさせて立っていた。

「お早よう」

と木山はいった。同じ社員の中でも、親しくしている友といつてよかった。学校時代からの友人ではないが、木山はこの会社に入つて三年になる、その間に出来たもつとも気心の知れた友人だった。飯塚恒夫が、自分と畑ちがいの京都の薬学専門学校を出て、東京へ就職してきて会社の隅っこに建てられた、まるで、秘密室のような研究所の中で、試験管とにらめっこをしている若手技師の中では、いちばん明るい男だと思っている。木山は会社の総務部にいた。部長の秘書役を兼ねた仕事で、文書起草や、社内報の編集にたずさわっているのだが、研究

所が毎月発表する頭の痛いような論文も、掲載しなければならぬこともあって、時々、二階建てのその薬品くさい研究室の部屋へ入ってゆくことがあるのだが、木山は飯塚恒夫がそこにいるというだけで何か救われたような気がしていた。同じ世田谷区に住んでいるということもあって、ふたりは社の帰りに、新宿で吞んだりすることもたびたびあった。飯塚もまた、学閥の物をいうこの業界の先輩後輩の顔いろをたえず気にしながらつとめてゆかねばならない。研究室内の空気に反感をもってもいたから、木山のような他課の男と吞むのをよろこんでいたのかもしれない。

「今朝の朝刊をみたか」

と走ってくるなり飯塚はいった。二十九歳だが独身の彼は蒼黒いせいもあって顔がいくらか老けてみえる。しかし、声は学生のように若かった。

「コンブ船か」

と木山はいった。

朝刊はよんでいた。

「またやられたね」

と木山はいった。飯塚の顔は暗い影をおびている。真実その新聞記事に心を痛めているという風にみえた。生真面目な性格の飯塚は、研究所の仕事で根室へたびたび出張していたことも、総務部にいる木山は知っていた。新聞記事に心をいためた表情をしていても不思議ではないと木山は思った。

「かわいそうに、六十三の老漁夫だったね。おかみさんがひとり残されたよ。新聞でみるとこの家族は、去年のシケにサケ船がひっくりかえった時、息子を亡くしている。気の毒な家だね」